

女子高生、中古音を学ぶ(3)

中村雅之

1. 36 字母

若菜は、自家製の‘イカの塩辛’と四切れほどの餅を手土産に仙人の家へ年始の挨拶に出かけた。イカの塩辛は新鮮な烏賊からハラワタを取り出して、千切りにした烏賊と和えて作った母親直伝の若菜の得意料理だ。母親の故郷では‘イカの切込み’と呼ばれている。若菜の父は正月になると、焼いた餅と一緒にこのイカの塩辛を食べるのを楽しみにしている。仙人にもトースターで焼いた餅と一緒に食してもらったら、予想以上に喜ばれた。口直しにインスタントのインド風紅茶‘チャイ’を飲みながら、中古音の声母の話になった。

「今では中国語を習う時にはピンインというローマ字を使うわけだが、昔は声母ごとに漢字の名称があった」

「個々の声母を漢字で呼ぶのですか？」

「うむ。それらの漢字を字母という。36 個あるので 36 字母と呼ぶのだが、個々の声母は‘～母’という。例えば、声母 [l] を‘来母’と呼ぶ。それから声母 [m] は明母、[d] は定母となる。これらの字母はその声母を持つ字の中から一つ選ばれた代表字だ」

「つまり、[d] という声母を持った字の中から‘定’を選んで定母というのですね」

「そうだ。このような名付け方はかなり普遍的な方法で、実は声調の名前‘平上去入’もそれぞれの声調を持つ字の代表字なのだよ」

「あ、なるほど。平は平声の字で、上は上声の字という訳ですか。ん？上は shàng ですね。おー、‘ジョウ’だから全濁上声か。それで4声なんだ。すると入は入声ですか？」

「入声ニッシュォウというくらいだから、-p の入声だ。旧仮名は‘ニフ’だな」

「ふむふむ。声母の話ですが、36 字母ということは、声母が 36 種類ということですか？」

「そこが微妙なところだ。まずは、全部並べてみようか。音価は‘ざっくり中古音’だ」

唇音				舌音				牙音				齒音				
幫	滂	並	明	端	透	定	泥	見	溪	群	疑	精	清	從	心	邪
p	p <sup>h</sup>	b	m	t	t <sup>h</sup>	d	n	k	k <sup>h</sup>	g	ŋ	ts	ts <sup>h</sup>	dz	s	z
非	敷	奉	微	知	徹	澄	娘					照	穿	牀	審	禪
f	f	v	ɱ	tʃ	tʃ <sup>h</sup>	dʒ	n					tʃ	tʃ <sup>h</sup>	dʒ	ʃ	ʒ
喉音				半舌音		半齒音										
影	曉	匣	喻	来		日										
ʔ	h	ɦ	j	l		ɲ										

「発音部位ごとにそれを示す伝統的な名前がついている。唇で発音するものを唇音といい、舌で発音するものを舌音という訳だが、軟口蓋音を何故に牙音というのかはよく分からない。伝統的にそう呼ばれている。最後の来母と日母は、舌音に近いから半舌音、歯音に近いから半歯音ということだが、これは現代人による呼び名だ」

「この中には同じ音価になっているものがありますね。非母と敷母がどちらも [f] だし、泥母と娘母が [n] になっています」

「うむ。実は‘非敷奉微’はそれぞれ‘幫滂並明’から分かれ出たものなのだ。これも重要なトピックだから、後で詳しくやろう。娘母に関しては、[n] としてもよいのだが、本当に泥母と明瞭な区別があったかどうかは議論があつて、ワシは区別がなかったという立場だ。敦煌から出土した唐時代の写本の中に、36 字母ではなく、30 字母のみを記したものがある。36 字母の前段階というべきものだが、それらには‘非敷奉微娘牀’がないのだ。つまり、娘は後から加えられたものだ。正直に言うと、泥と娘を分けるか否かは小さい問題なのでどちらでもよい。なるべく単純な方がいいので、区別しないでおく」

## 2. 非鼻音化の諸相

「前回、非鼻音化として話題になったのは、上の表で言うと明母・泥母・疑母でした。その他に鼻音としては微母 [m̥] と日母 [ɲʒ] がありますね」

「うむ。実は非鼻音化の表れ方というのは、声母ごとに異なるし、地域によっても異なる。微母は長安では [m̥ > m̥v > v] という変化を経て、最終的には鼻音要素のない [v] になった。しかし、北京など他の多くの地域では非鼻音化は起こらず、[m̥ > w] となっている。現代北京音では‘微 [m̥əi > wəi]’や‘亡 [m̥aŋ > waŋ]’などだ」

「すると、ゼロ声母と解釈している‘wēi’や‘wáng’の w は本来は鼻音声母だったのですか？」

「全部がそうだという訳ではない。疑母の‘外 wài’や喻母の‘王 wáng’などもある」

「うわー、複雑ですね」

「後で練習問題をやって確認しよう。残る日母だが、これは前期中古音では完全な鼻音 [ɲ] だった。それで日本の呉音ではナ行になる訳だ。これが8世紀までに [ɲʒ] になり、その後完全に鼻音要素が消えて [ʒ] になった。漢音ではザ行になる。この日母の非鼻音化は長安にとどまらず、北方全体で起こったらしい。北京でも [ʒ] から更にそり舌音化して [ʒ̥] になった。これを今ピンインでは r で表している。‘日 rì・人 rén’などだ」

「えーと、まとめるとですね、長安では明母・泥母・疑母・微母・日母で非鼻音化が生じて、そのうち微母と日母は完全に非鼻音になった。一方、北京では明母・泥母・疑母・微母には非鼻音化は起こらなかったが、日母だけは長安と同様に非鼻音化した。こういうことでしょうか？」

「そういうことだ。少し練習をしてみようか。‘武 wǔ・我 wǒ・文 wén・位 wèi・誤 wù’が微母・疑母・喻母のうち何母か考えてみなさい。微母は現代音のピンインでは w になるが

日本漢字音では明母と同じく、呉音マ行・漢音バ行だ。喻母は y-か w-で、日本漢字音でもヤ行かワ行だ」

「はい。まず武 wū は武者ムシャ・武士ブシですから微母です。我 wǒ はガですから疑母、文 wén は文盲モンモウ・文化ブンカですから微母です。位 wèi はイなので、喻母でしょうか。誤 wù はゴなので、疑母です」

「よし、それだけでできれば今は十分だ」

### 3. 音韻情報の記述

「残りの字母については後で見る。さて、ここまでは中古音についてざっくりとした理解を目指してきたが、ここからは少し細部に分け入っていこう。具体的な資料や専門用語が出て来るが、いいかな」

「了解です」

「例えば、‘端’という漢字の中古音の情報を調べようと思って、『古今字音対照手冊』という本を見たとする。そうすると、そこには‘山合一平桓端’と記されている。これは‘山撮合ロー等平声桓韻端母’の略だ」

「うひゃー、そのお経のような漢字の羅列が中古音の情報なのですか？」

「そういうことだ。専門家はそれを見ると、‘端’の中古音が [tuan<sup>平</sup>] だと分かるのだ。この中古音の音韻情報を理解できるようになるのが当面の目標だ。今の段階で分かる部分もあるだろう」

「うーん、‘平声’と‘端母’だけです。端母ですから [t] ということですね」

「そうだ。‘合口’は-u-介音のある音節だ。-u-介音のないものを‘開口’という。[tan] が開口で、[tuan] が合口だ。これで‘平声・端母・合口’は分かったので、残りは‘山撮’と‘一等’と‘桓韻’だが、今日は‘桓韻’とは何かということだけ説明しよう」

### 4. 切韻と広韻

「‘桓韻’というのは韻書の情報だ。韻書というのは押韻の基準を定めた辞典だな」

「前に狭義の中古音は切韻という韻書の体系だという話を聞きました」

「そうだ。しかし、隋の陸法言の切韻（601）は現存しないので、カールグレン以来増補版である大宋重修広韻（1008）を使ってきた。普通には、この書は単に広韻と呼ばれている。今では原本の切韻もほぼ復元されているが、長い伝統があるので、今でも広韻が利用されることが多い」

「切韻の復元というのはどういうことですか？」

「まず、現在我々が利用している広韻は多くが沢存堂<sup>タクソンドウ</sup>本と呼ばれるものだ。沢存堂というのは清初の張士俊と言う人の号だが、この人は貴重書の保存と普及に努めたことで知られている。広韻も彼が南宋時代の版本を復刻したおかげで、世に広まったのだ。カールグレンがこの書を利用したのは、これが利用できる最古の韻書だったからだ。ところが、

20 世紀の初めに西域の敦煌から大量の古い写本が発見されて、その中に唐時代の切韻の写本も相当数あった。それぞれが数葉ずつの断片ではあるが、その写本には原本の切韻に近いと思われるものから後の種々の増補版と思われるものまで、多種多様の切韻が含まれていたのだ。これらを切韻残巻と称している。さらには、太平洋戦争の終わった頃に故宮からほぼ完全な形で王仁响<sup>オウジンク</sup>の編になる刊謬補缺切韻（706）の写本が見つかった。刊謬補缺<sup>カンビュウホケツ</sup>というのは誤謬を正し、欠陥を補うということだな。原本切韻から約 100 年後の増補版ということになる。これらの資料から、原本切韻の姿も完璧ではないが、おおむね復元されているという訳だ」

「それならば、広韻を使う必要はないですね」

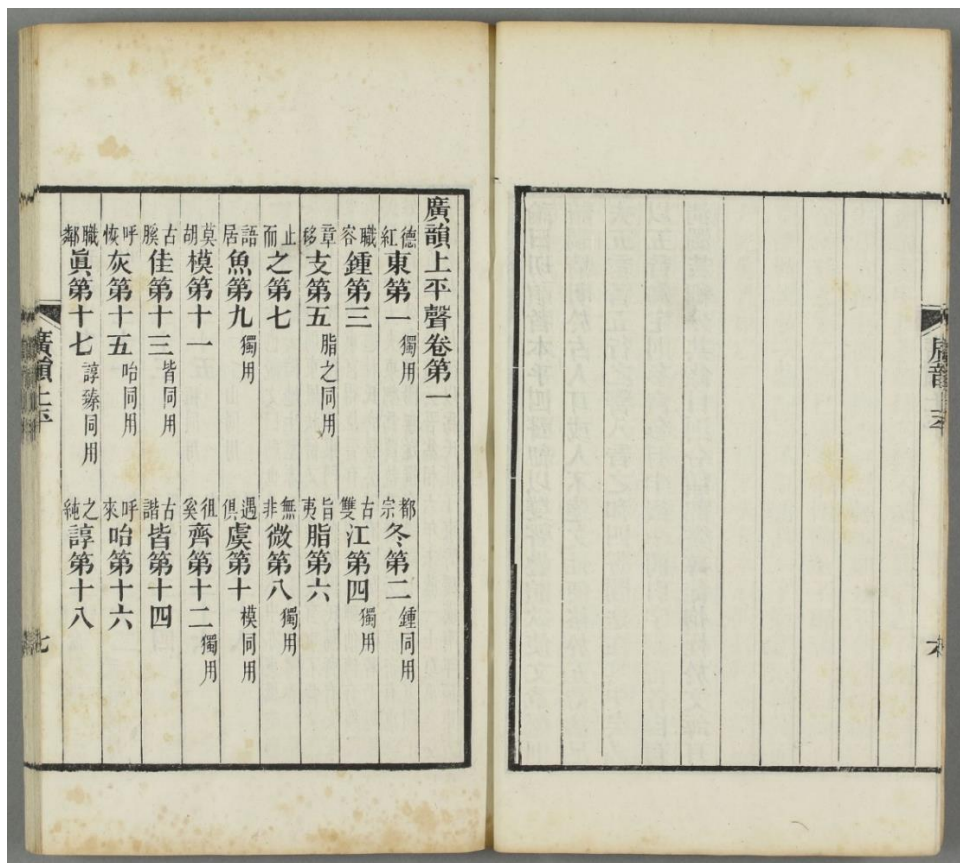
「そうでもない。広韻は手軽に利用できる影印本が普及しているが、原本切韻の復元本も王仁响の切韻も、一般人が簡単に利用できる状況にはないのだ」

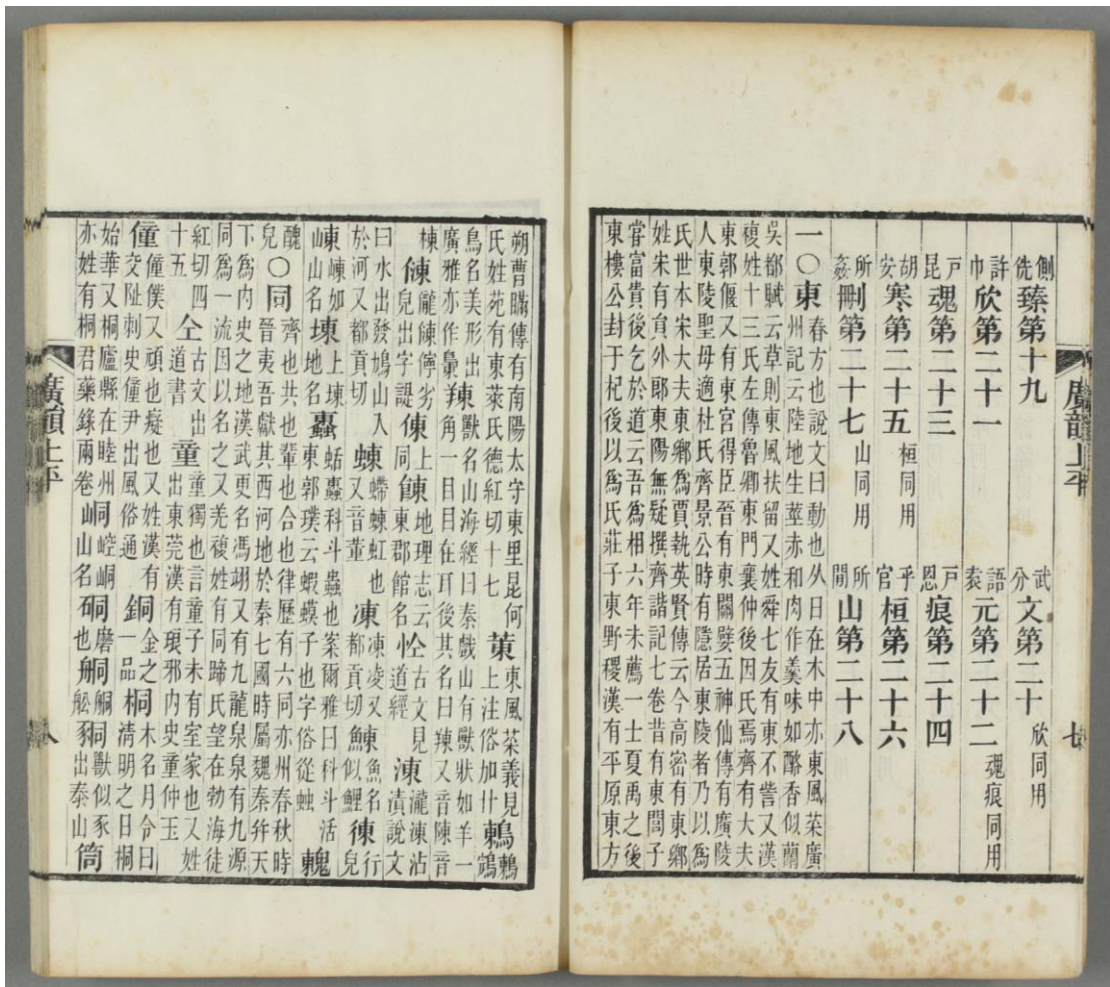
「でも、切韻が 601 年、広韻が 1008 年ということは、400 年の開きがあります。同じ体系を表したものと見なしてよいのでしょうか？」

「厳密にはよくない。原本切韻と広韻にどのような違いがあるかという点には注意が必要だ。それについては折に触れて確認することにしよう」

「分かりました。それで具体的には広韻とはどういうものなのでしょう？」

## 5. 韻目





「これが広韻本文の冒頭部分だ。この画像は早稲田大学図書館の古典籍総合データベース (<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>) から借用した。早稲田大学には数種の広韻が所蔵されているが、ここに引用したのは、小学彙函という叢書に収められた沢存堂本の復刻だ。広韻は声調によって全5巻に分かれている。これは第1巻の冒頭だ」

「廣韻上平声とありますけど、上平声というのは陰平声のことですか？」

「そうではない。平声に属する字は多いので、半分に分けたのだ。第1巻が‘上平声’で第2巻が‘下平声’だが、平声の前半と後半というだけで、声調が違うのではない。第3巻が上声、第4巻が去声、第5巻が入声になる。現代では第1巻というが、昔は‘卷第一’というのが普通だ」

「うーん、見ただけでは構成がよく分かりません」

「それはそうだろう。韻書というのは押韻の基準を示すのが役割だ。それで、韻を踏むことのできる字をグループごとにまとめているのだ。最初の目次のようなものは、押韻可能なグループの名前だ」

「東第一、冬第二、ですか。第一から第二十八はただの番号ですね。東や冬がグループの名前ですか？」

「そうだ。韻目と称している。東と押韻可能なグループが東韻、冬と押韻可能なグループが冬韻だ。東や冬はそのグループの代表字ということだ」

「なるほど。平声には全部で28のグループがある訳ですね」

「いや、これは前半の半分だ。第2巻の下平声に29の韻があるので、平声は57韻だ」

「そうでした、半分でした」

「上声は55韻、去声は60韻、入声は34韻ある。全部で206韻だ」

「声調ごとに韻の数が違うのですね」

「うむ。特定の声調にしかない韻母もあるのだ。ちなみに、先ほどの‘端’が属している‘桓韻’は26番目に見える韻目だ」

「つまり、先ほどのお経のような中古音の情報の中には広韻の韻目が記されるということですね」

「そうだ。広韻には平声から入声まで合わせて206韻あるのだが、原本切韻では193韻だったことが分かっている。それでも中古音研究においては広韻の韻目を用いるのが習慣だ」

「本文ですが、東の字には長い注釈がありますね。他の字もいろいろと細かい注釈が付いています」

「うむ。字の意味に関する注記だが、このほとんどが増補部分だ。韻書としては本来不要な情報と言ってもいい。原本切韻はもっとスッキリしていた」

「ははア、どうして増補版の広韻を原本切韻の代わりに使えるのかと思いましたが、要するに音とは関係ない部分が増補されたということですか」

「まあ、そういうことだ。音に関わる部分の増補や改訂もあるが、さほど多くはない」

「押韻可能なグループの字をまとめて、ただひたすら並べているのですか？」

「それだけではない。もっと重要な、核心的なことがある」

「核心的？」

「まず、各韻のグループはさらに音節ごとにまとめられている。これを小韻という」

「つまり、声母も韻母も同じまとまりですね」

「うむ。そしてそれぞれの小韻に発音が記されているのだ」

「え、発音？でも、昔はIPAなんかないし、どうやって発音を？」

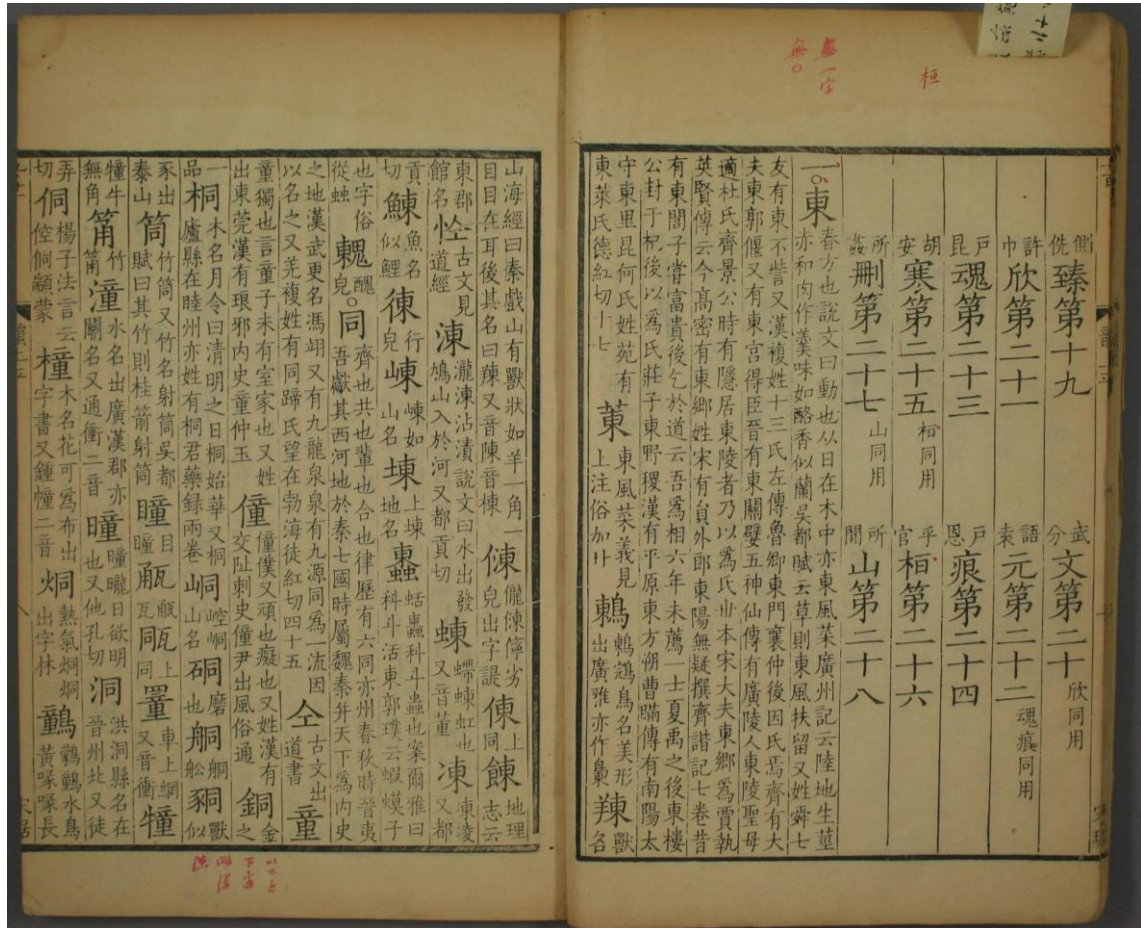
「反切という方法だ」

「ハンセツ？」

## 6. 反切

仙人の説明では、反切（はんせつ）というのは漢字二文字で発音を示す伝統的な方法だという。唐代までは「〇〇反」という形式で、宋代以降は「〇〇切」という形式になったので反切と言うらしい。漢字Aに対して「BC反」あるいは「BC切」という時、AとBは声母が同じで、AとCは韻母が同じだというのだ。つまり、Bが声母を表し、Cが韻母を表すらしいのだが、いま一つピンとこない。

「説明を聞いただけでは分からないだろうから、実例を確認しよう。今度は早稲田大学図書館の古典籍総合データベース (<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>)にある康熙 43 (1704) 刊の原本の沢存堂本広韻を見てみよう」



「朱筆で書き込みがありますね」

「早稲田大学が所有する前に元の持ち主が書き入れたものだ。韻目の‘桓第二十六’の桓に点が打ってあるのは、最後の一画が欠けているのを示しているのだろう。これは皇帝の諱（いみな）、つまり生まれた時に付けられた名だが、それを出版物に記すのは恐れ多いので、避ける習慣がある。これを避諱（ひき）という。避諱でよく行われるのは、他の字に代える方法と最後の一画を書かない方法だ。韻書のような辞書類では他の字に代えては意味がないので、欠画つまり一画を欠くのが一般的だ」

「桓が欠画されたということは皇帝の名だったのですね」

「北宋の第9代欽宗（1126-1127 在位）の諱だ。北宋最後の皇帝でもある」

「あれ、先ほどの小学集函の復刻版では欠画されていません」

「うむ。中国では種々の復刻版が出るのだが、良かれと思って勝手に手を加えることがある。欠画を補ったのもその類だ」

「本来の姿を知るにはなるべく古いテキストを見る必要があるのですね」

「さて、本題だ。東の字の下に長い注釈があるが、その最後を見ると、‘徳紅切十七’とあるだろう。これが反切だ」

「‘十七’は何でしょう？」

「この小韻に属する字の数だ。つまり、東から 17 文字が全く同じ発音で、その発音が‘徳紅切’という訳だ」

「えーと、徳が声母を表し、紅が韻母を表すのですか？」

「試しに現代音でやってみよう。ピンインで表すと、次のようになる。」

徳 (dé) + 紅 (hóng) → (dóng)

現代音には dōng という音はない。どうしてこのような変な音が導かれたのだと思う？」

「うーん、紅は紅蓮華 (グレンゲ) のグ、紅白のコウですから、全濁音です。紅は全濁平声だから現代音では第 2 声になるけど、求める音は徳と同じ声母で清音ですから、清音平声で第 1 声になるはずですよ」

「そういうことだ。実際、‘東’は現代音で dōng になる。これまで習った知識を用いれば、反切からでも正しい現代音を導けるということだ。もっとも、入声になると、正確な現代音を導くのは難しい。南京音が混じり込んでいるからだ。これは後で説明する機会があるだろう」

「反切は全音節、つまり全部の小韻に付いているのですか？」

「そう思ってもらっていい。小韻は○で区切られている。東から 17 字は同じ小韻だが、その次は○で区切られて‘同’小韻が続く。同小韻の反切は何か？」

「細かい字の注釈の最後を見ればいいのですね。‘徒紅切四十五’とあります」

「この場合は現代音でも、徒 (tú) + 紅 (hóng) → 同 (tóng) で問題ない」

「同も紅も全濁音だから、どちらも第 2 声になる訳ですね」

## 7. 反切は必要か？

「あの一、素朴な疑問なのですが、‘東：徳紅切’や‘同：徒紅切’でわざわざ反切を付ける必要があるのでしょうか？ どう見ても東や同の発音を知らない人がいるとは思えないのですが」

「それは尤もな意見だが、必要がなさそうな所にも全部反切を付けてしまうのが中国人なのだ」

「民族的な性格ということですか？」

「うむ。中国人というか漢人には、呆れるくらい大雑把な (大らかな?) 部分と、一度始めたら止まらない猪突猛進性があるのだ」

「例えば、どういう？」

「先ほど見た小学彙函の沢存堂本の復刻のように、欠画をそのままにしておく必要はないだろうと判断して直したり、よく知られているのは、書道で墨が薄い部分などを上塗りする

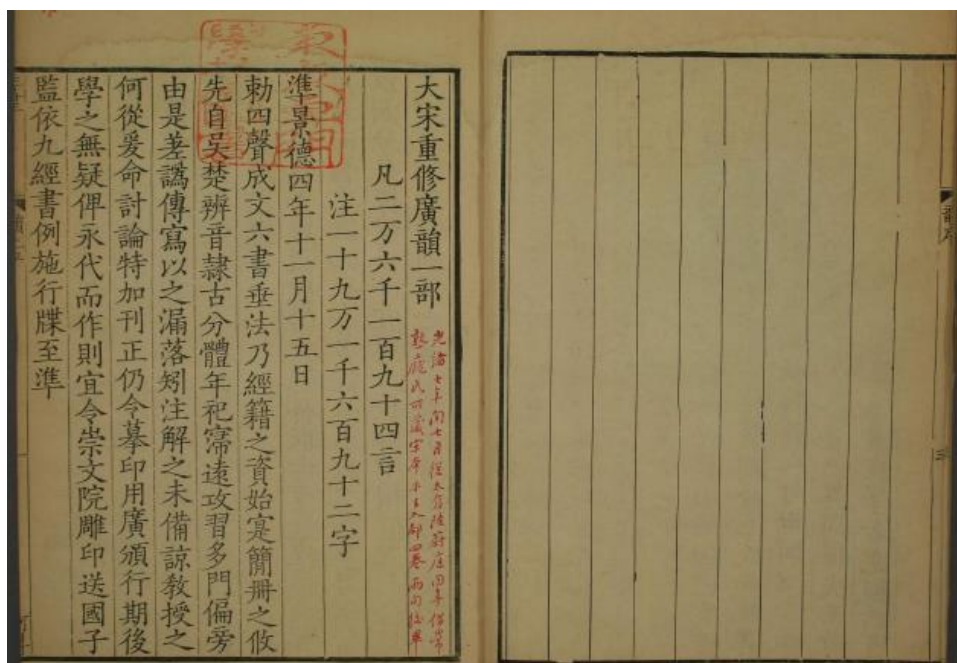
ことだ」

「ああ、なるほど。私も中国人の書道家が書いているのを見たことがありますが、普通に直していました」

「日本人の美意識としては書道で二度書きはいかがなものかと思うが、漢人はあまり気に留めない。欠画を直すなどはむしろ親切心からだというつもりだろう。もう一つの猪突猛進性は現代の廃墟となった高層ビルの山とか、EV車の墓場などを見ても何となく想像がつくだろうが、適当なところで現状を見直すということが苦手なのだ。これは悪い面ばかりでもない。例えば、漢字改革における日本と中国の方法を見ると、両者の違いがよく分かる。日本では、戦後すぐに教育普及のために当用漢字 1850 字を定めたが、その際、それまでに普及していた俗字を正式な書体として取り入れた。‘売（賣）・経（經）・齒（齒）’などだ。しかし、当用漢字以外の漢字には手を付けなかった。つまり‘冒瀆・頸椎・齟齬’と書く時には旧来の書体を維持した。一方、中国の文字改革では同じ要素を持つものは根こそぎ変えた。もともと、漢字のみを使用する中国ではそれ以外の選択肢はなかったとも言える」

「パソコンで打っていると、‘冒流’という字も出てきますね」

「そうしたくなるのが人情ということかな。広韻に話を戻すと、例えば広韻の本文の前にある序文の冒頭を見ると、こんな感じだ」



「何か数字があります」

「うむ。見出し字が 26,194 字、注釈が全部で 19 万 1692 字と書いてある」

「ひゃー、全部数えたのですか？」

「どうだ、なかなか徹底しているだろう」

「うーん、これじゃ、全部の小韻に反切を付けるくらいは、いかにもやりそうですね」

「うむ。書物の体裁にも民族性が表れるのだ。ちなみに、簡単な字に反切が必要な時もある

るぞ。次の画像はさきほど見た‘東’と‘同’の小韻に続く部分だ。‘中’小韻の反切を見てみなさい」



「陟仲切四です」

「いや、そうではない。‘陟弓切又陟仲切四’だ。この小韻の発音は‘陟弓切’だけで、‘又陟仲切’は見出し字の‘中’にはこの小韻の発音の他に‘陟仲切’もあることを示しているのだ」

「えーと、この小韻に二つの発音があるのですか？」

「いや、二つの発音があるのは‘中’の字だけだ」

「あ、少し分かってきました。‘中’から始まる四文字が‘陟弓切’の発音で、‘中’にだけ‘陟仲切’の発音が別にあるということですね」

「そういうことだ。現代音だとそれぞれどういう音になるかな」

「陟弓切が (zhi) + (gōng) → (zhōng) で、陟仲切が (zhi) + (zhòng) → (zhòng) ですね」

「うむ。‘なか’の時は平声で、‘あたる’の時は去声だ。現代音でも的に当たることを‘射中 shèzhōng’と言うし、‘中毒’は zhòngdú だ」

「なるほど、反切が二種類付いていれば、発音が二つあると分かるのですね」

## 8. 反切の口唱 (クショウ) 法

「ところで、どうして‘～反’が‘～切’に変わったのでしょうか？そもそも、‘反’とか‘切’というのはどういう意味なのでしょうか？」

「うむ。それはなかなか本質的な問題だ。反切というのは発音を求める方法だ。ということ、音を求めるための方法がなくてはならない」

「方法ですか？そう言えば、先ほどのようにピンインを使って声母と韻母をくっ付けるというのは、ピンインの表記法を知っている現代風の方法ですね」

「その通り。実際には反切をどのように口で唱えながら音を導いたかが問題になるのだ。つまり、反切の口唱(クシヨウ)法だ。君なら徳紅切という反切からどのようにして音を導く？ざっくり中古音で徳紅は [tək fiup<sup>平</sup>] だ」

「いや、普通に [tək fiup<sup>平</sup>] > [tə fiup<sup>平</sup>] > [tə up<sup>平</sup>] > [tup<sup>平</sup>] のような感じで、真ん中のごちゃごちゃした部分を徐々に落としていきます」

「なるほど。縮合式口唱法だな」

「縮合式？」

「反切の上の字と下の字、つまり上字と下字をギュッと強引に縮める口唱法だ。宋代以降の人も同じように口唱していたらしい」

「そんなことがどうして分かるのですか？」

「宋代の学者が書いたものを読むと、反切の起源を古来の二合音に求めるものが多い。二合音というのは、「之乎→諸」「而已→耳」「何不→盍」のように、二字が縮まって一字になったものだ。これに反切の起源を求めるということは、反切をそのように続けて読んでいたということになる」

「続けて読むのは、ごく普通のやり方だと思うのですが」

「まあ、明清代の人々もそう考えた。だから、徐々にそういう口唱法に適した反切が作られるようになる。[ta ai] > [tai] とか、[li iap] > [liap] のように、続けて読めばすぐに音を求められるようなタイプだ」

「あ、確かにそれだとスムーズですね」

「しかし、広韻の反切はそうには出来ていない。上字と下字を続けて読むと、途中に余計な音が多いのだ」

「なるほど、‘中’の反切の時も、‘陟弓切’とか‘陟仲切’でした。あまりスムーズに読めそうにありません」

「宋代には‘切’は‘こすり合わせる’の意味だと考えられていた。切磋琢磨の切だ」

「あー、上字と下字をこすり合わせる、縮合式口唱法の雰囲気がありますね」

「しかし、唐代以前には、反切は縮合式口唱法では読まれていなかったし、表記にも‘切’ではなく‘反’が用いられていた」

「‘反’はどういう意味なのでしょう？」

「元々は‘反対・さかさま’という意味だが、実際には‘反語’の略と考えるべきだろう」

## 9. 南北朝反語から反切へ

「反語には反切の意味もあるので、少しややこしいのだが、ここで言う反語は南北朝時代

に流行った一種の占いというか、過激な言葉遊びだ」

「過激な言葉遊び？」

「南朝宋の明帝（439-472）は袁愍（えんびん）という人の姓名が不吉だと言って、名を改めさせたそう。不吉である理由は、袁愍の反語が‘殞門’（＝家を没落させる）になるからだ。この場合の反語は‘反対言葉’ということで、声母と韻母を交換した言葉ということだ。‘袁愍 [jiuən min]’の声母と韻母を交換すると、‘殞門 [jin muən]’に近い発音になる。それが問題だと言うわけだ。正確には [jin miuən] だから、ピッタリ合わないが、我々のごっすり中古音は唐代音の韻母を用いているから、余計に合わない。前期中古音だと主母音はもう少し近い。いずれにしても少し強引な部分はあるのだが、当時はこのようにもはや遊びとは言えない過激なことが行われていた」

「でも声母と韻母の組み合わせを取り換えるって、瞬時にできますか？」

「できる。古代中国では双声（そうせい）とか疊韻（じょういん）ということに非常に敏感だった。同じ声母の熟語を双声語、同じ韻母の熟語を疊韻語という。例えば、‘蜘蛛 zhīzhū（クモ）’は双声語で、‘螳螂 tángláng（カマキリ）’は疊韻語だ。双声や疊韻は古代における基本的な造語法だから、耳に馴染んでいる。‘髣髴’‘躊躇’‘支離滅裂’‘魑魅魍魎’のような面倒な語でもそれが双声語や疊韻語から構成されていることによって、覚えやすく忘れにくいのだ」

「それは反語とどういう関係が？」

「大ありだ。反語を作る時には、最初に双声語を作り、次に疊韻語を作るという決まりがある。徳紅 [tək hup<sup>平</sup>] の反語を作ろうとする場合、最初に徳を基準にして双声語を作る。つまり [tək hup<sup>平</sup>] > [tək tu<sup>平</sup>] だ。次に疊韻語を作ると [tək hup<sup>平</sup>] > [tək hək] になる。この2回の作業で作られた [tu<sup>平</sup>] と [hək] を合わせて‘東鋤 [tu<sup>平</sup> hək]’という反語ができる。先ほどの袁愍の例だと、[jiuən min] > [jiuən jin]、さらに [jiuən min] > [jiuən miuən] によって、[jin miuən]（≡殞門）という反語を作る。そして、反切から音を求める作業というのは、実はこの反語を作る作業の前半部分なのだ」

「えーと、[tək hup<sup>平</sup>] > [tək tu<sup>平</sup>] という作業で [tu<sup>平</sup>] を導くのですね」

「うむ。したがって、その作業、口唱法と言ってもよいが、それを指示しているのがそれぞれの反切に付いている‘○○反’なのだ。反語作成（の前半）の作業をして音を求めよということだ」

「はあ、なるほど。つまり、唐代以前は反切から音を導くのに、反語作成の前半の作業をしていたから○○反で、宋代以降は縮合式口唱法に依ったので○○切になったと」

「そういうことだ。俗説では、○○反は‘謀叛’を想起させて縁起が悪いので○○切になったと言われたりもするが、ナンセンスだ。それは○○切を用いる説明にはなっていない。反を用いないということと、切を用いるということは互いに別のことなのだ」

「確かに」

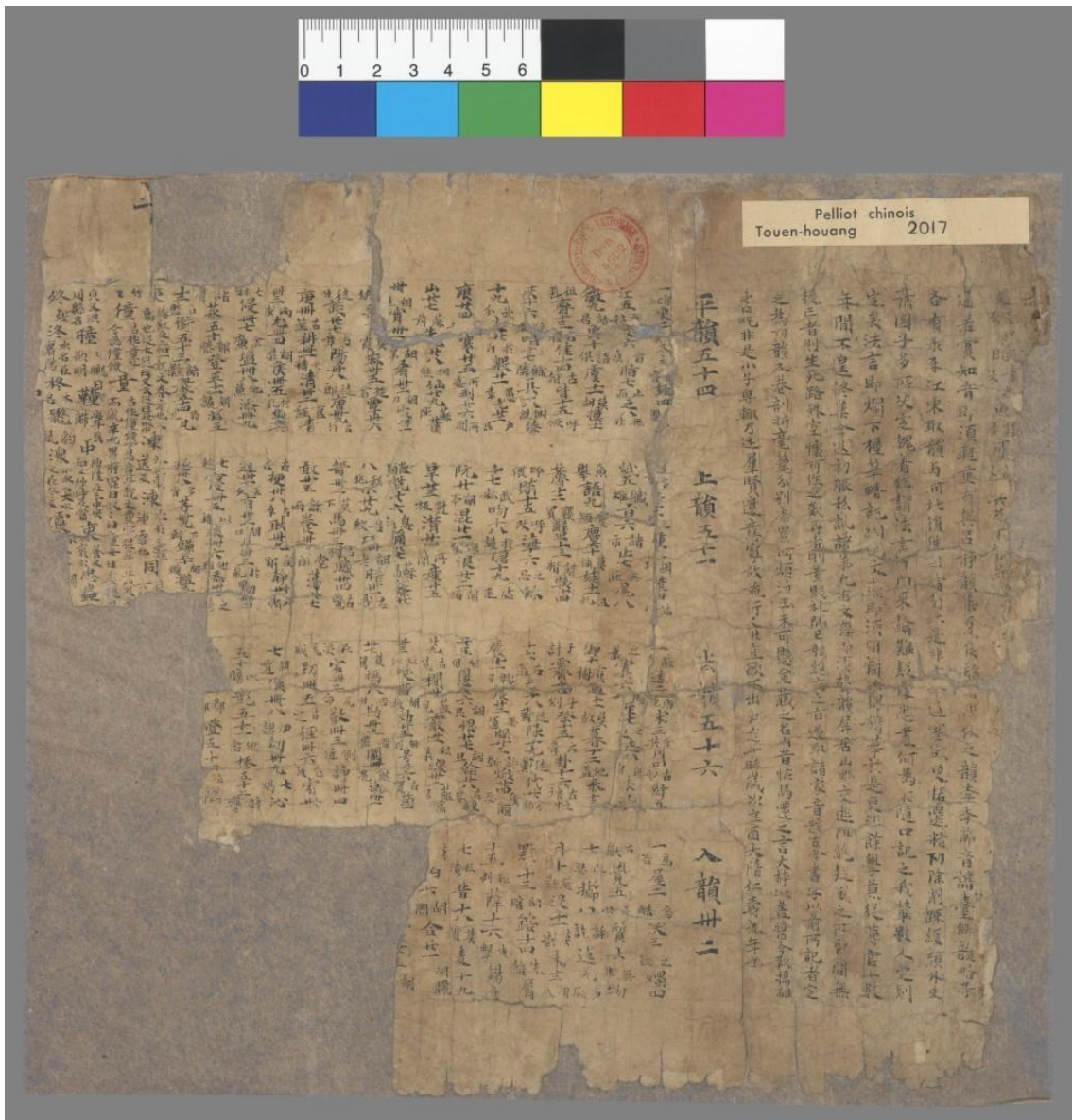
10. 韻と韻母

「ところで、韻目の数ですが、広韻では206ですけど、原本切韻では193だったと仰いませんでしたか？」

「言った」

「それは、前に話題に出た切韻残巻によって分かるのですか？」

「そうだ。実際に見てみようか。‘P2017’と呼ばれている残巻がある。これはネット上で簡単に見られる（以下はGallicaからダウンロードしたもの）」



Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France. Département des Manuscrits. Pelliot chinois 2017

「この残巻は原本切韻ではないが、比較的初期の切韻の写本だ。一葉だけだが、なかなか情報量は豊富だぞ。広韻とは異なり、本文の前にすべての韻目が出ている。欠落部分はあるが、十分に有用だ。声調ごとに韻目の数が書いてあるだろう」

「平韻 54、上韻 51、去韻 56、入韻 32 です。全部足すと、193 ですね」

「先ほど問題になった桓韻を探してみてください」



「あれ？広韻では‘寒第二十五・桓第二十六・刪第二十七’でしたけど、P2017 では‘寒廿五・刪廿六’で、桓韻がありません」

「うむ。桓韻がないのは正しいが、番号が間違っているぞ」

「え？あー、この写本では番号の後に韻目があるのですね。つまり、‘廿四寒・廿五刪’ですね。番号と韻目の間に反切があるので、分かりにくいです。そもそも、こんな所に反切なんか要りますか？」

「やるとなったら、トコトンだ」

「はあ、とにかく切韻では桓韻がなかったということは分かりました。どうして韻目を増やしたのでしょうか？」

「ひとつの韻には複数の韻母があることが多い。切韻の寒韻には [an] と [uan] という二つの韻母があったのだ。ところが、この二つを別の韻にしても良いのではないか、その方が分かりやすい、と考えた人がいたのだろうか。それで [an] の寒韻と [uan] の桓韻に分けた」

「ひとつの韻に複数の韻母があることをどうやって知るのですか？」

「うむ。実に単純な作業で分かる。清の陳澧 (チンレイ 1810—1882) という人が創案した反切系聯法だ」

「反切……ケイレンホウ？何だか足が攣りそうな名前ですね」

「痙攣ではない、系聯だ。つなぎ合わせるということだ」

## 11. 反切系聯法

「この方法は声母に対しても有効なのだが、当面の問題は韻母なので、韻母に関する実例を示そう。

東：徳紅切

同：徒紅切

反切の原理により、「東」の韻母は「紅」の韻母と同じだ。また、「同」の韻母も「紅」の韻母と同じだ。したがって、「東」と「同」は同一の韻母を有することになる。数学の照明

問題のようだろう。A=CかつB=CならばA=Bということだ」

「なるほど、確かに単純な作業です」

「このほか、もしも‘東・同’を反切下字にもつ字があれば、それらの字の韻母もやはり同一ということになる。このような方法を重ねてゆき、グループ分けをしてみれば、ひとつの韻の中に何種類の韻母があるかを確認できるのだ」

「??そんなに簡単に行きますか?」

「実際にやってみようか。東韻には全部で34個の小韻がある。それを反切と一緒に書き出しておこう。本当は自分で反切を探すのだが、今は方法論を知るのが先決だから、あらかじめデータを与えておく。イカの塩辛のお礼だ」

「ふふ。ありがとうございます」

東 (徳紅切)	同 (徒紅切)	中 (陟弓切)	蟲 (直弓切)	終 (職戎切)	仲 (敕中切)
崇 (鋤弓切)	嵩 (息弓切)	戎 (如融切)	弓 (居戎切)	融 (以戎切)	雄 (羽弓切)
蒼 (莫中切)	穹 (去宮切)	窮 (渠弓切)	馮 (房戎切)	風 (方戎切)	豐 (敷空切)
充 (昌終切)	隆 (力中切)	空 (苦紅切)	公 (古紅切)	蒙 (莫紅切)	籠 (盧紅切)
洪 (戸公切)	叢 (徂紅切)	翁 (烏紅切)	忽 (倉紅切)	通 (他紅切)	菱 (子紅切)
蓬 (薄紅切)	烘 (呼東切)	峴 (五東切)	櫛 (蘇公切)		

「えーと、色を塗っていいですか?」

「もちろんだ」

「多く使われているのは‘紅’と‘弓’のようですから、まずは紅を黄色で、弓を青にしてみます。それ以外は緑です」

東 (徳紅切)	同 (徒紅切)	中 (陟弓切)	蟲 (直弓切)	終 (職戎切)	仲 (敕中切)
崇 (鋤弓切)	嵩 (息弓切)	戎 (如融切)	弓 (居戎切)	融 (以戎切)	雄 (羽弓切)
蒼 (莫中切)	穹 (去宮切)	窮 (渠弓切)	馮 (房戎切)	風 (方戎切)	豐 (敷空切)
充 (昌終切)	隆 (力中切)	空 (苦紅切)	公 (古紅切)	蒙 (莫紅切)	籠 (盧紅切)
洪 (戸公切)	叢 (徂紅切)	翁 (烏紅切)	忽 (倉紅切)	通 (他紅切)	菱 (子紅切)
蓬 (薄紅切)	烘 (呼東切)	峴 (五東切)	櫛 (蘇公切)		

「ほう、三種類になったな」

「でもこれで韻母が三種類ということになるのでしょうか?不安しかありません」

「その直感は正しい。まず緑の‘宮’だが、これは‘弓’と同音だ」

「そうして分かるのですか?」

「広韻を見れば分かる。今回は資料を直接に見る手間を省いているから却って分かりにくいかも知れない。該当箇所を見てみようか。下の画像を見ると、左の方に‘弓’の小韻があって、その小韻の中に‘宮’も含まれている。つまり、弓と宮は完全に同音だということが



「そういう事だ。今日の宿題は反切系聯法だ。平声唐韻にいくつの韻母があるかを確認してみなさい。君はパソコンを持っていたな。データは自分で早稲田大学図書館のサイトからダウンロードすればいい。‘広韻 早稲田大学’で検索すると行き着くはずだ。くれぐれも‘又〇〇切’を拾わないようにな」

「了解です」

## 12. 資料を扱うということ

仙人の話だと、昔はインターネットもなかったので、古い写本資料を画像で見ることではできなかったという。資料集は模写か解像度の粗い影印本しかなかったのだそうだ。それが今、唐代の写本も原色のままネットで見られるのは隔世の感があるということだった。

20世紀初頭に英国のスタインやフランスのペリオが敦煌から多数の古写本を持ち去った中に切韻残巻が含まれているらしいというニュースは早くから広まっていたが、実際にその内容を知ることはできなかったそうだ。世界が初めてその内容を知るのは、王国維がペリオから送られた写真を基に模写をして1921年に刊行した『切韻残巻三種』によってなのだという。しかも、その三種の切韻残巻は、実際には英国のスタイン文書であったにも関わらず、王国維はこれを‘巴黎國民圖書館藏’と思い込んだ。当時の情報網がいかに脆弱であったかを物語るものだなと仙人は言い、加えて、21世紀の情報化社会に生きていることに感謝せねばならぬな、と研究環境の進歩をありがたく思っている様子だった。

帰り際に仙人は言った。

「先人たちの仕事は偉大だが、時代の制約もあり誤謬が含まれていることが少なくない。趣味として学問をやるなら細部にこだわる必要もないが、多少なりとも専門的にやるなら、資料の扱いには細心の注意が必要だ。君ももうすぐ大学生だ、肝に銘じておきなさい」